鉄道支援を核に多様な団体の地域活動が結びつく

⑮津軽鉄道サポーターズクラブ【五所川原市】

今日的課題・地域課題

○地域の鉄道支援を旗印に、多様な団体・個人が結びつき多様な地域活動を展開。
○鉄道沿線の地域間で連携し、大きな地域活性化のうねりを生む。

施設・団体の目的、経緯

津軽鉄道は、五所川原市と中泊町（旧中里町）を結ぶ奥津軽唯一の鉄道で、８０年以上にわたり地域の経済を支えてきた私鉄です。しかし、自動車の普及と過疎化によって利用者の減少が続き、苦しい経営を強いられていました。そのような中、平成１７年４月にＪＲ福知山線脱線事故が発生し、国は全国の鉄道に対し「緊急保全整備事業」の実行を指示しました。国や自治体が経費の８割を補助するとはいえ、鉄道会社の自己負担（津軽鉄道の場合約９千万円）があり、津軽鉄道は存続の危機に陥りました。そこで、窮状を知った地域の有志が集まり、「地域の鉄道が持つ社会的役割と文化的価値を評価し、市民主導と参加によるサポート活動を展開し、地域の鉄道を存続・発展させることを通して地域活性化に寄与する」ことを目的として、平成１８年１月に「津軽鉄道サポーターズクラブ」は発足しました。

サポーターズクラブは、会長、副会長、運営委員数名、監事で役員会を組織し、１年目にフォーラムを五所川原、金木、中里の各地区で開催して会員を募ったところ、約６００名が参加しました。永久欠番制で会員は現在９００番台まで増えていますが、毎年会費を払っている会員は４００名程度です。年会費は、一般・大学生が千円、高校生５００円、親が会員である小中学生は無料で、他に１口５千円以上の法人会員があり、年間４００万円ほどの予算で運営されています。予算の半分は会員への通信費で、残りの予算と県や市の事業委託や補助金を受けて、様々な活動を展開しています。

津軽鉄道本社1階「サン・じゃらっと」

地域の思いに応えるために津軽鉄道が地域交流スペースとして開放した、津軽鉄道本社１階の「サン・じゃらっと」に事務局を置き、月１回コアメンバーが集まって、活動内容や企画の話し合いをしています。「サン・じゃらっと」にはサポーターズクラブのほかコミュニティカフェ「でる・そーれ」が入り、地域の市民活動、住民交流の拠点として機能しています。

活動内容は、地域に人を呼び鉄道利用者を増やす各種イベントを企画する一方で、研修会やフォーラム、ワークショップを通して、地域の課題の洗い出しをしたり、地域課題について行政と対話するなど、住民相互の学び合いを継続して続けています。津軽鉄道だけをサポートするのではなく、また、自分たちの住む地域だけで何かをするのではなく、津軽鉄道沿線すべての奥津軽地区を元気にするために、地域の住民や各団体はもちろん、他地域の団体等とも交流・連携し、地域活性化の大きなうねりを生み出しています。

特長的な活動・工夫等

訪問した日は、「ごしょがわら街歩き事業」が行われていました。午前中は五所川原市中央コミュニティセンターを会場に参加費無料で「一次救命・AED 講習会」、午後は参加費３００円で「豊後高田市の街歩きガイド　藤原ちず子さんといっしょに街歩き＆トーク」を実施しました。地域資源や地域課題を発見するために必要な午後の部の「街歩き」がメインですが、同時に、安全な地域活動がなされるためには救急救命の学びが必要であると考え、五所川原市西北中央病院防災救急医療対策委員会との連携で午前の部も企画されました。このように、直接目的を達成するための活動や人気の高い活動だけでなく、中長期的な展望で必要な課題にも、バランス良く取り組むことで、地に足のついた着実な地域づくりにつながっています。

一次救命・AED 講習会の様子

また、サポーターズクラブと連携する団体は数多くありますが、特に同じ「サン・じゃらっと」に居を構えるコミュニティカフエ「でる・そーれ」の存在も、地域活性化の大きな柱になっています。でる・そーれは、子育て支援に取り組むＮＰＯ法人子どもネットワーク・すてっぷのメンバーが中心となって、別組織の企業組合として立ち上げたものです。「食」を通した地域交流と奥津軽全体の情報発信の拠点づくりを目的とし、地元の食材を活かした食事や地元の土産品の販売等を行っています。交流を促進するためにミニコンサートや料理教室等を開催したり、弘前大学人文学部のゼミと連携授業をしたり、高校生と一緒にスイーツづくり・販売をしたりして、住民交流と若者の地域参画の機会を創出しています。

また、平成２３年６月からは、津軽五所川原駅の売店に県立五所川原農林高校の生徒が運営する五農農業会社が入るなど、津軽鉄道はあらゆる地域活動のシンボル的な存在となっています。

コミュニティカフェ「でる・そーれ」

駅構内の五農農業会社

今後の展望、課題等

○特定の団体や個人ではなく、地域のシンボル的な交通機関だからこその求心力があり、地域を良くしたい思いのある個人や団体が集結できています。

○支援者の輪が広がり津軽鉄道の危機的状況は脱しましたが、経営が苦しいことは変わらないので、今後も様々な仕掛けと活動を継続していく予定です。

○中心的な役割を担うメンバーが固定化してきているので拡大と若返りを図りたい、とのことです。

取組のポイント・ヒント

◇津軽鉄道の支援を核に、志のある異業種の団体や個人が集まり、活動内容や手法は違っても、地域を良くしたいという大きな目的で協力し、影響し合って、地域づくりの大きなうねりを生み出しています。

◇様々なジャンルで地域活動に取り組む団体がつながることで、それぞれの団体の活動がさらに充実していくという好循環が生まれています。

○訪問日
　平成23年9月24日
○訪問委員
　三浦テツ、小笠原睦男
○対応者
　津軽鉄道サポーターズクラブ高瀬英人副会長、飛嶋献会長、企業組合でる・そーれ　辻悦子さん　ほか

津軽鉄道サポーターズクラブＨＰ　http://tutetu.join-us.jp/
コミュニティカフェ「でる・そーれ」ＨＰ　http://www.delsole-aomori.jp/

行政との連携で有志がつながり町の課題に取り組む

⑯町づくり応援隊 いいべ！ふかうら【深浦町】

今日的課題・地域課題

○行政の人材育成事業の参加者が、地域活性化を目指す団体を自主的に立ち上げ。
○雇用、観光、少子高齢化対策、公共施設の立直し等、多岐にわたる地域活動。

施設・団体の目的、経緯

「いいべ！ふかうら」は、地域を活性化し、人を元気にし、町を元気にすることを目的に、平成２２年５月に結成された町づくり応援隊です。会長は保育園理事長の大沢さん、副代表は地元で飲食店を経営する山本さんで、約３０名の会員がいます。もともと地元の現状（過疎化、高齢化、雇用問題、地域コミュニティの形骸化）をどうにかしたいと思っていた二人は、それぞれ別々に地域活動に取り組んでいました。しかし、どのように仲間を集めどのように活動すればよいか手探りのまま、あまりうまく活動できていなかったそうです。そのような中、平成２１年に太宰治生誕百周年事業で、「津軽鉄道サポーターズクラブ」や「ＯＨ！！鰐元気隊」の活動を知り、大きな影響を受けました。さらに、平成２２年に深浦町が、住民協働型地域活性化事業「ふかうら未来塾」を実施し、町づくりリーダーの育成と、地域課題解決の検討に取り組んだことで、町を元気にしたい人が一堂に会する機会が得られました。この「ふかうら未来塾」で、大沢さん、山本さんをはじめ志のある住民が出会えたことが、「いいべ！ふかうら」の設立につながりました。

「いいべ！ふかうら」は、年会費３千円の会員が約３０名で、月１回の定例会を開き、活動内容を話し合っています。活動のメインは深浦町を訪れる観光客の出迎えと見送りをする「手を振り隊」で、また休館中の町の施設「ピアハウス」の再生を検討しています。

ピアハウスは、平成７年に開館した町営の観光商業施設ですが、赤字経営が続き、指定管理者の引き受け手もいなくなって、平成２０年に休館しました。「ふかうら未来塾」の中で、街おこしの方策としてピアハウスの再生を提言するグループがあり、再開が検討され始めました。そのような中、「いいべ！ふかうら」会長の大沢さんを委員長に、漁業協同組合や観光協会などの各団体とともに運営実行委員会が組織され、平成２３年９月から２ヶ月間の試験営業を実施することになりました。

メンバー手作りの横断幕（看板）

「いいべ！ふかうら」の「手を振り隊」、「ピアハウスの試験営業」ともに、深浦町が強くバックアップしています。「いいべ！ふかうら」の定例会やピアハウス運営実行委員会の会議等は町役場の会議室で行うことが多く、夜遅くまでかかる会議にも町の職員が出席してサポートしています。町は、地域のために活動する意欲のある人を育て、地域のための活動がスムーズに行われるよう、しっかりと支援しています。

手を振り隊の活動

特長的な活動・工夫等

訪問当日は「いいべ！ふかうら」の「手を振り隊」活動日でした。町内行事と重なったため、参加者は１０名ほどでしたが、深浦駅前に朝９：００からテントを立て、メンバーはおそろいのハッピを着て、山本さん直筆の看板を持ち、電車や観光バスが来るたびにメンバー全員で手を振ります。また、テント内では、「合同会社ＣＢ深浦」が開発した地元食材を生かした食品や土産物を販売していました。この合同会社は、コミュニティビジネスで地域活性化と若者の雇用創出を図るために平成２３年に設立したものです。

ピアハウス内展示（はっぴデザイン募集）

ハッピは、木造高校深浦校舎の高校生がデザインし、むつ小川原財団の助成金で作成しました。長机や椅子、のぼり等の必要な物品は深浦町役場が無償で貸し出しています。深浦駅も全面的に協力し、電車が入る時刻にメンバーがホームに立つことを許可するのはもちろん、電車の運転士や駅員も一緒になって手を振っていました。

また、２ヶ月間の期間限定で試験営業中の「ピアハウス」も訪問しました。試験営業中の施設の維持管理費は町が負担し、緊急雇用の助成金で従業員を雇い、経営方針はピアハウス運営実行委員会で検討しています。ピアハウスが新たな住民交流の場になるよう、社会教育の手法（各種講座や井戸端会議の開催）を取り入れ、また公的施設としては斬新な経営手法（酒類の提供、夜９時までの営業、地元商店と競合しない商品の販売）で、試験期間中の営業は好調でした。

ただ、年間を通して営業するにはまだまだ課題が多く、また関係団体の意向等もあり、平成２４年７月現在「ピアハウス」の今後については深浦町で検討中です。

ピアハウス外観

今後の展望、課題等

○活動は始まったばかりで、地元住民の理解や協力はまだ広がっていないのが実情ですが、町外の人が取材に来たり、町外の支援者が増えてきているので、メンバーは自信を深めている、とのことです。
○「ふかうら未来塾」を通して、住民と行政との関係が非常に良くなったと感じています。子どもたちが戻りたい、残りたいと思える町にするため、今後も町の魅力発掘と雇用創出に取り組んでいきたいと考えています。

取組のポイント・ヒント

◇行政が町づくりのリーダーとなる人の発掘と育成を行い、志ある住民がつながったことで、住民による主体的な地域活動が活性化しています。
◇同じ思いを共有する仲間の存在と行政の後押しが、高齢化・人口減少・経済の低迷などの大きな課題に対しても、怯まず取り組む原動力になっています。

○訪問日
平成23年10月9日
○訪問委員
三浦テツ、小笠原睦男、
小山内世喜子
○対応者
大沢潤蔵　いいべ！ふかうら会長（ピアハウス運営実行委員長），山本千鶴子　いいべ！ふかうら副代表（ピアハウスマネージャー）ほか

いいべ！ふかうら副代表山本さんのブログＨＰ　http://plaza.rakuten.co.jp/sailingmaho/

市民が交流し学びあう文化観光交流施設

⑰ねぶたの家ワ・ラッセ【青森市】

今日的課題・地域課題

○駅前市街地の活性化とねぶた文化の伝承を担う新しい施設。
○文化と観光にとどまらず市民の学習・発表の場、住民交流の場を提供。

施設・団体の目的、経緯

青森市文化観光交流施設ねぶたの家ワ・ラッセは、青森駅前中心市街地の活性化と、ねぶたを核とした文化・観光の振興を目的に、青森市が設置した新しい公共施設です。

東北新幹線全線開業に向けて平成１４年から構想に着手し、青森駅周辺整備の基本構想、基本計画の策定を経て、平成２３年１月５日に開館しました。

開館前の平成２２年１０月から社団法人青森観光コンベンション協会が指定管理者となって、オープンイベントから施設運営を手掛けてきました。常勤１０名、パート職員２０名の運営スタッフで運営されていますが、中でも副館長の黒滝さんは民放テレビ局に在籍した経験から、イベント等での集客ノウハウと人脈があり、魅力的な企画を次々に打ち出しています。

ワ・ラッセは大晦日と元日以外ほぼ無休で、開館時間は概ね９：００～１９：００（エリアと季節によって異なる）ですが、公民館的な機能を持つ貸室エリアは２２：００まで利用できます。主な施設は、有料エリアの「ねぶたホール・ねぶたミュージアム」（大人６００円、高校生４５０円、小中学生２５０円※青森市内無料）、商業エリアの「土産ショップ」「レストラン」、貸室の「イベントホール（１８０人収容）」「交流学習室（３室）」「多目的室（２室）」などがあります。

青森市文化観光交流施設ワ・ラッセ外観

青森駅近くの立地でもあり、観光客に向けた企画やイベントも開催しますが、同時に地域文化の伝承・振興と市民交流の場の提供も強く意識した運営を心掛けています。例えば、青森市内の小中学生の施設利用は無料のほか、ねぶた囃子の練習などねぶたの伝承・発展に関わる活動についても施設利用は無料になっています。また、青森市民を強く意識した各種企画や、青森駅前の地域全体が盛り上がる事を考えて、青い海公園やアスパム、新町商店街などと連携したイベントを実施して、お互いに相乗効果が出るよう協力しあっています。

そのため、来場者は開館以来順調に伸び続け、開館８ヶ月で２２万人以上を記録し、当初予想を上回る実績をあげています。市の担当課への報告と相談も密にし、市内の様々な機関や団体、施設や学校と連携した事業を展開することで、青森市の新たなシンボルとなる公共施設として認知され市民から広く支持されています。

エントランスホールに本日の催事情報

特長的な活動・工夫等

ワ・ラッセの主な取り組みは、

①ねぶた文化の保存伝承…ハネト体験、ねぶた囃子教室、衣装着付け教室、ワ・ラッセ工房（金魚ねぶた等制作教室）、ねぶた学講座、大型ねぶた常設展示などを定期的に実施しています。平成２４年からはワ・ラッセ工房の出前授業も始めました。

②地域文化の振興と発信…ねぶた制作者個展、絵画版画コンクール、震災復興チャリティライブ、ワ・ラッセ市民ＳＨＯＷ などの企画展、特別展を季節に応じて随時開催しています。

③集客、地域活性化…ウォーターフロント（ワ・ラッセ、アスパム、八甲田丸）共通チケット、新町商店街「街づくりあきんど隊」や青年会議所、行政等が行うイベントへの連携協力、ワ・ラッセ友の会運営、修学旅行誘致、マスコミ・旅行会社招聘、広報の充実などに取り組んでいます。

今回訪問したのは、「ワ・ラッセ市民ＳＨＯＷ～敬老企画～」でした。１８０席のイベントホールを市民に無料開放し、文化・芸能の伝承に力を注いでいる保育園・学校・サークル等に、広く発表の場を提供する企画です。平成２３年度の市民ＳＨＯＷは７月、９月、１２月の３回の開催で、７月の第１回は駒込獅子踊、宮田獅子舞、浪岡登山囃子の発表を行いました。今回はお年寄りに贈る子ども音楽発表会で、午前と午後の２回、市内の４か所の施設からお年寄りを招待し、子どもたち（油川幼稚園、子どもＪＡＺＺダンスクラブ、浜館ねぶた同好会、筒井小学校吹奏楽部）が歌や踊りを披露するという企画でした。子どもたちのかわいらしい踊りや完成度の高い演技に、参加したお年寄りの方たちも楽しんでおり、今後も市の施設として、市民を主役にした企画に力を入れていく予定です。

子どもたちのよる歌と踊りの披露

今後の展望、課題等

○市民のリピーターが多く、青森市民であることを改めて意識したり、青森市のことを考えてくれていると手ごたえを感じているそうです。

○ライブなどの特別企画や大きなイベントは人気があるが、ねぶた工房やねぶた学講座など地道な活動を大事にしたいと考えています。特に、一流のねぶた関係者が講義するねぶた学講座は、文化の保存継承として重要と考えているので、ＤＶＤ等でライブラリー化する予定です。

※平成２４年度はホームページで講座の動画配信を始めています。

取組のポイント・ヒント

◇駅前の観光拠点施設の機能にとどまらず、文化の伝承・振興と、市民の学習や活動の場、市民交流の場としての機能も強く意識することで、多くの市民が訪れる公共施設となっています。

◇職員の情熱と信念、経験とノウハウによって、魅力ある事業が展開されています。

○訪問日
平成23年9月10日
○訪問委員
秋庭隆貢、浅田豊
○対応者
黒滝久可　ワ・ラッセ副館長

青森市文化観光交流施設ワ・ラッセＨＰ　http://www.nebuta.or.jp/warasse/

市民の主体的な活動を支援する多目的複合施設

⑱八戸ポータルミュージアムはっち（八戸市）

今日的課題・地域課題

○市民を主役に多様な市民活動に対応できる新しいコンセプトの交流施設。
○雇用創出、地域活性化、市民意識向上、子育て支援…地域課題に多角的に取り組む。

施設・団体の目的、経緯

八戸ポータルミュージアムはっちは、新たな交流と創造の拠点として、賑わいの創出や観光と地域文化の振興を図り、中心市街地と八戸市全体の活性化を目指すことを目的に設置された新しいコンセプトの公共施設です。構想が始まった平成１７年当初は、地域の祭りである八戸三社大祭を核とした地域観光交流施設でしたが、平成１８年に「中心市街地中核施設として市民交流、観光ＰＲ、各種イベント開催に対応できる複合的な施設」とする方針が出され、基本構想、基本計画策定を経て、平成２３年２月１１日に開館しました。

運営組織は館長、副館長、企画運営グループ１０名、総務経営グループ８名の、計２０名（市の正職員１０名）で、その他１回千円で４時間勤務する市民ボランティア（登録者約１００名）が常時２名おり、５階建ての広い館内で人手の足りないところを補っています。企画運営グループは４名の市職員と、全国から公募したイベント、広告、芸術等に強い専門家の嘱託コーディネーター６名で、ワークショップや各種企画を手がけています。総務経営グループは３名の市職員に、補助業務や舞台・音響・照明の技術を担当する嘱託職員と臨時職員がいて、施設の管理運営にあたっています。また、外部から企画を手掛けるディレクター２名（文化芸術担当、観光振興担当）と契約しているほか、大学や文化財団、八戸観光大使など８名によるアドバイザリーボードを設置し、より良い企画と施設運営がなされるよう努めています。

八戸ﾎﾟｰﾀﾙﾐｭｰｼﾞｱﾑ　はっち　外観

施設は市の中心商店街にあり、１３のテナントによる商業機能と、八戸をテーマごとに紹介する博物館機能、多彩な市民活動ができる貸室機能が同居する多目的複合施設です。１階は大きなイベント展示のできる「はっちひろば」、放送スタジオ、常設展示「八戸のあれこれ」など。２階は図書コーナーとリビング、常設展示「海山里の魅力、祭りや街の賑わい」など。３階は「音のスタジオ」、「和のスタジオ」、常設展示「忘れえぬ人々や産業」など。４階は「子どもはっち」、「食のスタジオ」、小規模工房が集まる「ものづくりスタジオ」など。５階は総合的な創作スペースで、「工作スタジオ」、「共同スタジオ」、「共同キッチン」、宿泊可能なレジデンス、事務ステーション、会議室など。演劇、音楽、料理、工作などあらゆる制作活動に対応できる設備とスペースがあり、また研修会から展示発表まであらゆる表現活動、市民活動に対応できる貸室を備えています。

市民のあらゆるニーズに応える充実したハード（施設・設備）とイベントや企画の専門家集団による斬新で魅力あふれるソフト（事業）によって、開館半年で来場者５０万人を超える驚異的な賑わいを生み出し、全国から注目される施設となっています。

特長的な活動・工夫等

「はっち」は、オープン以来常に新しい仕掛けと活動に取り組んでおり、写真展「八戸レビュウ」や、アートプロジェクト「八戸のうわさ」はマスコミにも取り上げられ全国的に高い評判を呼びました。「はっち」の素晴らしさは、八戸で元気に暮らす人や生き生きと活動する人こそが地域資源であるという理念で、市民の存在そのものに価値があり、市民の誇りを認識する場と位置づけていることです。八戸弁で会話をする市民、サークル活動で頑張っている市民、その姿をそのまま誰でも見ることができるように建物は設計されています。館内には至る所に椅子や机があり、貸室もガラス張りやオープンなスペースが多く、館の事務室すらも外から見えるスペースにあります。誰でも気楽に立ち寄れ、来れば常に誰かが何かをしているという期待感が、多くの人の足をはっちに向けさせています。

また、大きなイベントに目を奪われがちですが、地域の小さなサークルや団体の活動支援、伝統工芸や若手起業家の支援等にも力を入れています。想定できるあらゆるイベントや活動に対応できる設備と多くの貸室を用意し、様々な市民団体が活動の場と発表の場を得ています。格安のテナント料で、小規模店舗や工房にスペースを与え、顧客の獲得と経営ノウハウを学び、いずれは外の商店街での本格的な起業へとつながるように支援しています。

訪問日は「和日カフェ」の日で、日本文化にかかわる活動をしている人たちの展示や発表が行われ、テナントも含め館内は和風に統一されていました。中心商店街では、「はっち」で開催されるイベントに合わせて、相乗効果のあるイベントが実施されています。また、民間企業が商業イベントを開いたり、次の日には公的機関が研修会やフォーラムを開いたりしています。このように、一年を通して様々な団体や機関が「はっち」を中心に様々な活動をしています。

「はっち」は、民も官も併せて市内のあらゆる機関、団体、個人が交わる場であり、あらゆる地域資源が集まり、新たな魅力の発見と文化の創出がなされる場となっています。

はっち1階　左：ギャラリー　右：はっち広場

今後の展望、課題等

○施設を利用する人、店や工房を開く人、来館する人、みんな顔と活動がお互いに見える仕組みであるため、団体では新たな会員の増加、テナントでは常連の顧客獲得につながっています。

○衰退気味であった市の中心街を訪れる人が増加し、はっち開館以来中心商店街の空き店舗に新規出店が２０店舗と、当初予想を上回る実績と地域への影響を与えています。

○大きなイベントを実施し、成功したことで施設の認知度は上がったが、しかしだからこそ、地元の市民と密着した地道な活動を、今後は一層大切にしていきたいと考えています。

取組のポイント・ヒント

◇市民の存在そのものが最大最高の地域資源であるという明確なコンセプトを持ち、市民の多様なニーズ・活動に対応可能な設備を持つ、全く新しい多目的複合施設です。

◇学習活動から表現活動、経済活動までをも含めて、あらゆる市民の活動を掘り起こし、応援する姿勢が徹底しており、多くの市民が利用し集う場になっています。

○訪問日
平成23年10月16日

○訪問委員
椛沢孝子、佐々木秀智、小山内世喜子

○対応者
八戸ポータルミュージアムはっち　淡路徹　企画運営グループリーダー（訪問時）

八戸市ポータルミュージアムはっちＨＰ　http://hacchi.jp/ha/index.html